

1930年代の国文学研究(2)風巻景次郎の位置 について

KINUGASA, Masaaki / 衣笠, 正晃

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

(1)

(終了ページ / End Page)

(20)

(発行年 / Year)

2006-01-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002773>

一九三〇年代の国文学研究(二)

— 風巻景次郎の位置について —

衣笠正晃

はじめに

国文学者・風巻景次郎(一九〇二—六〇)の文学観・文学史観のキーワードが「主体性」であるということ、彼と親交の深かった西郷信綱をはじめとする、風巻についての議論のなかでの通説となっている⁽¹⁾。そして「主体的にしか把握できない文学」というテーゼが風巻の著作のなかで最初に登場するのが、一九四〇年に刊行された著書『文学の発生』(子文書房刊)に収められた書き下ろし論文「文学の発生」である。

このなかで風巻は、「作品は一個の書き物としてはそのただの事物に過ぎぬ。それを文学と感ずるのは読者の心だ。文学の発生はまづ文学を享受する者の心におこる⁽²⁾」と断言するとともに、「個人的な文学成立のはたらきを唯一の武器として、文学史を書く⁽⁴⁾」ことを目指すという自らの立場を宣言しているのだが、この「主体的／主体性」というタームは、『神々と人間』(八雲書林、一九四一年)、『日本文学史の構想』(昭森社、一九四二年)、『文学史の問題』(『季刊国文学』第一号、一九四七年十一月)といったその後の著書・論文で執拗なまでに繰り返され、太平洋戦争の時期をはさんで、晩年にいたるまで風巻の文学史論の中心に位置しつづけることになる。

しかし同じ風巻は、一九三〇年代前半に書かれた一連の論文——「文芸と個性」(『文芸道場』一九三〇年十一月

(2)

号)、「日本文芸学の発生」(『国文学誌』一九三二年十月、十一月両号)、「新興国文学」(『コトバ』一九三四年一月号)——のなかでは、「文学が、歴史的に変化してゆく姿を把握したいが為に、これを客観的事物と見得る限りの立場にふみとゞま」り、「文芸が文芸たり得る為に人の主観的側面に依拠して居るかに見える部分についても、これを客観的事物としての可視的狀態に転移せしむる方法」(6)を追求するという、彼の言うところの「歴史的立場」に立った文学研究の確立を主張していたのである。

このような大きな立場の変化ないし転換が、どうしてこのように比較的短い期間に生じたのであろうか。それを考えるためには、一九三〇年代、とくにその後半の時期が、いわゆる「文芸学論争」に代表されるような、国文学研究における方法論的・学問的あり方の問い直しの時期にあたっていたことを思い起こす必要があるだろう。

本稿では、三〇年代後半における風巻景次郎の活動と発言を具体的に追うことで、当時の国文学界における風巻の位置を見定めつつ、学界の動きが風巻の文学ないし文学史観に与えた影響を具体的に検討してゆくこととする。

一 『新古今時代』の問題

風巻によって前掲のような国文学研究の新しい立場を表明した論文が発表された一九三〇年代前半は、彼の最初の著書『新古今時代』(人文書院、一九三六年)に収められることになる、藤原定家と『新古今集』を中心とした中世和歌論・歌人論が書かれた時期と重なっている。『新古今時代』にはこうした国文学研究の方法論自体をテーマとした論文は収録されていないものの、個々の作家論・時代論などに「歴史的立場」の具体的適用を見ることが出来る。

藤原定家を論じた「定家伝と時代相——定家の実生活と歌とを関係づける一試論」(初出『国語と国文学』一九三一年十月号)⁽⁷⁾では、新古今時代の中流貴族の生活状況の余裕のなさを資料にもとづいて検証するなかで、社会生

活への絶望から「逃避的生活に心憧れる傾向」が生じることを論証し、「新古今調の定家の歌は、その逃避的感情に於て発生した」という結論を導き出している。また作品論・時代論としての『新古今集』の特質と時代的傾向「(初出『国語と国文学』一九三〇年十月号)においては、現実からの逃避として「過去への関心」「古典憧憬」が生じたことを、本歌取りをはじめとする「引喩」技法の検討から結論づけた上で、つぎのようなアンビヴァレントな態度で論文を締めくくっている。

観念の世界への帰向、美の世界への憧憬が、現実のみちめさに反対してあくまで強くなり、成長する点より見て、新古今集の文学は、実に希望と理想と努力とを失つた者の文学であつた。私はその善悪に就いては触れる事を避けて筆を止めよう。

このように『新古今時代』の諸論文では、「逃避的態度」というキーワードに集約されるかたちで、作家をとりまく社会的・階級的な要因と作品の内容・技法を結びつけるという方法的実践がなされている。当時の書評を見ると、例えば風巻と東大国文科の同期であつた西下経一は一九三六年九月の『国語と国文学』で、『新古今時代』における「芸術性そのものを研究対象とした」論文と「文学の特性を政治的・経済的事情から説明しようとした」論文の併存を指摘し、後者には否定的な評価を下している。これに対して風巻の大坂府女子専門学校における年長の同僚であつた石山徹郎(一八八八—一九四五)は、同年十二月の『文学』で、風巻が「研究対象の実証的考証と、その文芸としての特質闡明の方法たる社会・歴史的研究とを、二つの武器として」いると指摘し、本書が若い研究者の「研究の方向と方法の上に」示唆を与えると述べている。また同じ石山による「国文学界の諸学派」(『国史国文』第二巻第一号、一九三七年三月)は、国文学界における「歴史社会学派」という名称を確立したとされる論文だが、このなかで石山は「歴史・社会学派」という項目を立て、そのなかで近藤忠義、永積安明、熊谷孝らと並べて風巻の名を引き、『新古今時代』を「実証的方法と歴史的社会的的方法との融合」の例として挙げてい

この石山の評価に従うなら、風巻の『新古今時代』は、一九三六年以降、「鑑賞主義」や岡崎義恵による「日本文学」に対する批判を展開するなかで学派として認知されてゆくことになる。「歴史社会学派」の、最初のまとまった「著書」として世に送られたことになる。⁽¹⁵⁾

一九三六年当時、風巻が近藤や永積ら「歴史社会学派」の人々と近い関係にあったことの傍証としては、風巻、近藤のほか、重友毅、森本次吉を同人とする研究誌『日本文学研究』第一輯の刊行(白帝社、三六年一月)が挙げられよう。また永積の証言によれば、一九三六年、風巻、永積、近藤、佐山清というメンバーでの文学研究会が開かれていた。風巻がこの研究会を自らの理論学習の場としていたことは、永積の研究発表を受けてただちに、それまでの自説を否定して中世文学の上限を平安期にまで遡らせるという内容の論文「中世文学の史的限界」(『文学』一九三六年九月号)を発表したというエピソードにもうかがえる。⁽¹⁶⁾

一方で、当時の論壇・文壇を席卷しつつあった「日本的なるもの」ないし日本の性格(そしてそれをささえる理論としての岡崎義恵による「日本文学」)の核心が、「中世的なるもの」と形容すべき封建的性格にあると見定め、近藤・永積にとっては、その批判にあたって、風巻による実証的な資料・作品の検討に裏付けられた中世和歌研究は有用なものであったに違いない。本来かならずしも和歌に興味の中心を置いていなかった近藤・永積は、風巻の『新古今時代』における論証を受けて、超時間的な「中世的なるもの」に、時代的・階級的に限定されたものとしての中世的特徴ないし性格を対峙させたのである。

永積安明の場合を見ると、「新古今和歌集論稿」(『立命館文学』一九三六年十二月)において、新古今歌人の言語感覚は鋭敏・深癖であるものの「懐古とその詠嘆以外には、現実性を失った、或る種の浪漫的意識に仕へ、かゝる秩序を破らうとする一切の新しきもの、現実的なものへの敏感なる反撃であり、拒否であった⁽¹⁷⁾」(『傍点原著』)という見方を示している。また近藤忠義は「和歌史上における貴族——末期荘園貴族と新古今時代の和歌——」(『短歌研究』一九三七年一月号)で、『新古今集』の新しさが「余情」の創造にあったと認めながら、その「余情」は「強い伝統主義の態度」から生じる「言葉に言ひ現はし得ない超論理的なもの」であり、「畢竟一抹の哀感・寂寥感」

にすぎず、結局は当時の「荘園貴族の物の見方、考へ方の特性たる反現実的・逃避的・神秘的・宗教的諸傾向の反映」だとしている。⁽¹⁸⁾

このように近藤・永積の議論においては、『新古今時代』における風巻の中世和歌・歌人にたいするアンビヴァレントな態度が、より否定的な方向に読み替えられたことが看取される。

二 風巻における「論争」

このように風巻の新古今論は、当時の「日本的なるもの」、そして岡崎文芸学をめぐる論争に利用されたわけだが、風巻自身はこうした論争とどのような関わりをもっていたのであろうか。以下にそれを、実証主義と、古典の現代的意義という、二つのトピックから整理しておきたい。

風巻がこの時期おこなったことの一つとして、いわば国文学界全体を距離をおいて見渡し、整理する作業が挙げられる。すでに一九三五年（『国文学界展望』『書物展望』十月号）、三六年前半（『新古今集研究の方法的特性』『国語と国文学』四月『国文学の方法論』特輯号所収）の段階で、（とくに大正末以来の）国文学界の現状を研究史のなかに位置づける作業をおこなっていたが、三六年六月創刊の『国文学』解釈と鑑賞誌上で「国文学時評」に代表される学界時評の盛行のなかで、風巻はその「卓抜なる整理的頭脳」⁽²⁰⁾を發揮し、重要な書き手の一人と目されることになる。そして学界時評は、学界事情の解説・論文の紹介といった当初のあり方を越えた「時評の時評」へと変化し、学界における論争の場となつてゆくのである。

一九三六年『短歌研究』十二月号における「今年度国文学界の展望」は、風巻による本格的な時評のうちで最初のものといえる。このなかで風巻は、三五年あたりから国文学にたいする一般の関心が高まる一方で、国文学界では研究者数の増加とともに「実証主義」的な基礎研究（ないしは作業）が飽和し、ようやく「学派的対立」が生じたことを、鑑賞をめぐる問題を例として取り上げている。⁽²¹⁾

この風巻の時評にたいして、早速翌一九三七年一月の『国文学 解釈と鑑賞』の時評で「実証的研究論者の言」と題する反論をおこなったのが、藤田徳太郎であった。このなかで藤田は、風巻が整理作業にすぎないと断じた実証的研究を「自然主義的態度であり、客観的態度」であると位置づけ、「現象の解釈に主観的な態度をもつて臨む、他の研究方法」と異なる、より優れたものとして擁護している。⁽²³⁾

このように客観的であることを至上価値とする藤田に対して、風巻は翌二月号の同誌の「国文学時評——実証主義に触れて——」で再批判を試みている。風巻はこのなかで、藤田の言う「客観的態度」の徹底は結局「無の立場」⁽²⁴⁾とでも言うべきものへとつながり、「なにか宗教的な性格が出てきて、科学性が稀薄になる」ことを危惧している。しかし藤田は同じ立場の主張を繰り返す。同年七月の『国文学 解釈と鑑賞』で、自らがよって立つ「文献学的態度」「考証的研究」が「最も客観的な実在性を帯びた研究方針」であるとし、これ以外の学派はいずれも「主観的解釈を加へる」「脆弱な研究」であると断じるのである。⁽²⁴⁾

このような藤田とのあいだでの「実証主義」をめぐるやり取りから風巻が得た一つの結論が「実証主義と実証精神」(『国語と国文学』一九三七年七月号)という文章であると思われる。ここで風巻は、本来「実証(的)精神」としてあるべきものが国文学研究において「実証主義」という、ひとつの「主義」に墮した⁽²⁵⁾こと、その「生命力の衰耗」を厳しく非難している。さらに風巻は、同七月の『文学』誌上の「学界進化の第二次徴候」では、「事実の価値を絶対視する」実証的国文学研究は「一種の客観主義」であるとして批判し、今日的な批評意識よる「真に主體的な評価」をもつ必要性を力説している。⁽²⁶⁾このように、風巻による一連の実証主義批判のなかで「実証主義」が「客観主義」と結びつけられるとともに、「客観主義」が批判されるべき立場として位置づけられたことに注目しておきたい。

つきにもう一つの、古典の現代的意義という問題に移ろう。すでに触れたとおり一九三六年ころから始まった「日本的なるもの」をめぐる議論は、三七年に入り論壇において一種のブームの観を呈するようになる。そうしたなかで風巻は、このテーマそのものを題名とした文章を発表している(「日本的といふこと」『音楽』一九三七年三

月号)。その終わりで風巻は、「古典主義的な唯美主義」にもとづく『新古今集』に共鳴する現代の知識人に「古典主義的の傾向」を認めつつ、次のように結んでいる。

我々は古典主義的な立場から、幽玄だの、ものあはれだの、粹だのといふ既成の美的範疇の何れかの上に日本的なものを感じたり、又はそれ等のすべてを包括しうるやうな抽象概念を作り上げてそれを日本的なものと考えたりする必要はありません。我々の日本的なものはつねに我々現在の生活の底に燃えてゐる筈なのです。外には現れてゐない地熱として存してゐる筈なのです。その旺盛な力が正当に發揮され、新しい生活を秩序づけ、新しい様式を具体化するやうに期待しようではありませんか。⁽²⁾

さらに、『文学』三十七年四月「古典批評号」に掲載された論文「研究の対象としての古典」は、学界俯瞰と古典評価の問題を結びつけた上での、風巻なりの「日本的なるもの」についての結論を示した論文であると言えるだろう。このなかで風巻は「日本的なるもの」を考えるにあたって、超歴史的に存在している「日本人を運命として貫く日本的なるもの」と、今日の知識人を動かす現代の「要求としての日本的なるもの」の二者を区別する必要があると述べた上で、岡崎による文芸学・既成のアカデミアの国文学の双方ともが、前者の過去志向的な「日本的なるもの」を対象とし、文学自体を研究の対象となしえていない、と結論づけている。風巻によれば、文学作品に古典としての価値を与えるのは上述の二者のうちの後者、言い換えれば「現在における切実な共感」なのである。⁽²⁸⁾

抽象的な美的概念として「日本的なるもの」を定立しようとすることへの批判は、すでに見た近藤や永積らによる主張と方向性を同じくするものである。しかし、現代の知識人が当然持たざるをえない要求としての「日本的なるもの」をむしろ積極的に捉え、その要求に沿った古典や伝統の意義を追究するという視点は、風巻に特徴的である。そのことは同年五月の『水滸』誌上の次の文章を見ることで明らかになるだろう。

(8)

日本的といふ事は、実はすべての貧困な西洋模倣の主知的な立場を捨てる事の宣言である。そのやうにする事によつて、真に新しいものを生まうとする決意の宣言である。(中略)ジイドが言つてるやうに芸術の問題は何処まで行くかではなくて、何処へ行くかである。何処まで行くかは見透しがつくが、何処へ行くかは行つて見なければ分らない。昨日におさらばをして見なければ分らない。その意味で、決意が今日程要求されてゐる時はない。⁽²⁹⁾

この文章は風巻が学生時代から所属していた短歌結社の機関誌に載せられた、いわば身内向けのものだったためか、その口調は性急でさえあり、「決断」を称揚し迫る姿勢には、ロマン派的なものが感じられるといつてよいだろう。

三 歴史社会学派からの批判

以上のような一九三六年末から三七年前半までの風巻について、同時代において「歴史社会学派」としての位置づけがおこなわれていたことは確かである。この時期に近藤・永積により接近し、岡崎文芸学批判の急先鋒となつていた石山徹郎は、すでに見たように三七年三月の段階で風巻を「歴史・社会学派」のなかに数えていたし、また『文学界』三七年八月号の柴生田稔「国文学界の動向」では、風巻による前掲論文「実証主義と実証精神」(『国語と国文学』七月号)を取り上げて、「唯物史観に立脚する新評価を目指してゐるらしい」と結論づけている。⁽³⁰⁾

そのようななかで、近藤忠義を中心とする雑誌『文芸復興』が、一九三七年六月に創刊されている。この雑誌は単なる「歴史社会学派」の意見発表の場を越えた文化批評の場を目指しており、グループ以外の国文学者、あるいは国文学者以外の作家、批評家の論文・文章を積極的に掲載しているが、その第二号(一九三七年七月)に風巻は、『ものあはれ論』の史的限界」と題した論文を発表している。

このなかで風巻は、「ものあはれ」が、特定の時代、そして文学という領域に限定された概念にすぎないこと

を指摘することで、日本の歴史を貫徹する美的理念を想定する岡崎らに間接的に批判している。ここに見られる主張の骨組みは、近藤や永積による「中世的なるもの」に対する批判を、江戸期の本居宣長による「ものあはれ」に平行移動したものであって、「歴史社会学派」の学派としての立場に寄り添ったものであるといえるだろう。しかしその一方で風巻は、宣長が「主体的な理想家」として「儒教精神に対立する生活そのものを発見した」こと、外部的な条件の制約のなかで「人間の新しい存在形態たる真心」という、「新しい創造の母胎」を掴み取ったことを強調しているのである。⁽³¹⁾

このように、定家、宣長、そして芭蕉といった作者たちとその作品が置かれた歴史的・社会的な条件ないし制約を検討するなかで、そうした限界にもかかわらず実現された創作行為に、風巻は積極的な価値を認め、自らの生きる時代にとっての現代的な意義を見出すのである。だがそのことは、古典文学における歴史的・社会的条件の検討から現代の日本社会の封建的性格それ自体の批判を指摘した、近藤や永積の考え方とは相容れないことは明らかだった。事実、三七年七月『俳句研究』に発表された風巻の論文「芭蕉に於ける人間構造」は、翌八月の『文芸復興』誌上における近藤忠義の「ジイド氾濫」と題された国文学時評で、厳しい批判を受けることになる。

近藤の趣旨はインテリ層が「啓蒙」以外の「インテリ本来の仕事」を想定し模索することを「折衷論」と名づけて批判することに置かれているのだが、そのあらわれを芭蕉論の盛行に見る近藤は、この文章の末尾で「私の敬愛する同学の友」の文章とだけ断って、風巻の「芭蕉に於ける人間構造」からの長い引用をおこなっている。⁽³²⁾

芭蕉はすべてを肯定している。芭蕉には極て自然に、そして遅しくすべてのものが生きてゐるのである。(中略)彼の芸術にとつて大切だったのは、芸術以前の問題ではなくて芸術自体の問題だったのである。芸術以前の問題は、彼にとつて自明の事であつたに過ぎない。⁽³³⁾

風巻のもの論文ではこのあとに「芭蕉の芸術には、はげしい限界が存在する」という言葉もあるのだが、近藤

の立場からすれば外的条件の無条件な肯定は認められなかった、ということであろう。

この風巻への批判と並行して、『国文学 解釈と鑑賞』八月号の「国文学時評」では、永積安明が石山徹郎による一連の岡崎文芸学批判を取り上げて手放しで賞賛する一方で、文学理論が「現実の世界観」と不可分であり、「我々の全活動、全生活態度と固く結付くものであり、日常生活そのものが直ちにその理論に反映する」と主張している。⁽³⁴⁾この主張は、右の近藤による風巻批判と正確に符合したものとと言えるだろう。同じ文章での、学問と日常生活を区別する学者が「正しい理論に到達しえない」という永積の断罪ぶりは、前年(三六年)十一月同誌の「国文学時評」での片岡良一批判を思い起こさせる。「公平にはなく公正に」と題したこの時評のなかで永積は、鑑賞必要論の立場にも理解を示した片岡に対して「正しい科学的方法是、唯一つしかないのであるから、所謂公平な自由な批評などと云ふものはない」と難詰していたのである。⁽³⁵⁾このような、のちの風巻の言葉を借りれば「立場の異なる者に対する不寛容」「閉鎖的な偏狭」と呼ぶべき態度は、風巻に強い疎外感を感じさせたものと推察される。⁽³⁶⁾

四 『新古今』への回帰

こうした「歴史社会学派」の側からの風巻批判と時を同じくして、風巻の側も彼らに対して距離を置き始めていく。そしてその距離は、自らの学問的出発点であった『新古今集』に対する積極的な評価によって表明されることになる。

同じ一九三七年八月の『短歌研究』に発表された「新古今的なもの意義」で風巻は、『新古今集』に対して強い共感を自らを感じていることを率直に認める。『新古今集』において「一種の頹廢の美が歌の髄までも染めぬいてゐる」こと、「蝕れたる生活、頹廢期の生活が、新古今的なものの根源によこたはつてゐる」ことを認めながらも、風巻は次のように言う。

類靡期にあつて真に他の時期のものとは區別され得る性格の彫り出された芸術作品を生み得る精神は、それだけで凄く強靱なものと云はねばならぬし、際つて又その創造のはげしさは字義どほり彫心鏤骨であらねばならぬ。その如き喘ぎを知る精神は、常に自己とは別箇の、及ばざる世界として、巧まずして勁き生命の調を感じわけるであらう。⁽³⁹⁾

風巻は『新古今集』の「絢爛」を、「生活の類靡を文芸たらしめる芸術精神の緊張」のみによつて成し遂げられたもの、つまり「無からの創造」であつたとし、それは歴史上希な「世にも凄絶な時代転換の潮流のたぎり合ふ時」であつた新古今時代だからこそ可能であつたとする。こうした点に風巻は、「新古今なるもの」の「現代的意義」を認めるのである。⁽³⁹⁾

さらに風巻は、前述の近藤主宰の『文芸復興』誌上（十月・十一月合併号）に発表した「新古今集について」で、『新古今集』に対する肯定の度合いをさらに強いものにしてゐる。風巻はこのなかで、『新古今集』が「消す由もない文芸作品としての徴標」を備えた、「驚くべき困難を征服し」た上での達成であるとして、「再び新古今集の歌が、単に夢を食ふ者の安易な自己耽溺であると考へられてはならぬ」と宣言する。風巻からすれば定家は「現代に於ける創作行動への観察と批判の結果に等しいもの」をすでに所有していたのであり、「夢想し耽溺することの快に恍惚とする閑雅の徒の正反対」であり、「心と詞との統一」を成功させ得た作家である。新古今時代の歌人たちは短歌という形式を超えた、新しい形式を生み出しえなかつたことは事実だが、「問題はたゞ古きを知つて古き形式に愛着を感じる所の、その虚無の熱情である」と風巻は断言するのである。

このような『新古今集』の積極的評価という立場表明を経て、風巻はこれまで見せなかつた歴史社会学派への直接の批判を行なうことになる。そのときに利用されたのが、すでに見た「客観主義」というタームである。

『文学』一九三七年十二月号の「昭和十二年度国文学界概評」で風巻は、岡崎義恵の「日本文芸学」の主張と、それに対する石山徹郎による批判の双方を取り上げている。風巻は岡崎文芸学が「文芸性」自体を研究の対象とす

る点の新しいさを認めつつも、その文芸性を様式に限定し超歴史的なものと考えするという「非歴史的立場」が明確であることを指摘する一方で、石山の岡崎批判については超越的文芸性を明確に批判していると認めながら、「図式的」で「生きて動く文芸の歴史の把握に不自由」な点、その認識論の根本に「自然科学的客観主義」が存在している点を、前年に展開された近藤周辺の熊谷孝らによる鑑賞不要論の例を引きながら批判しているのである。風巻はこの客観主義は実証主義者の心中にあるものと同じのものであるとし、「客観主義がある限り文芸自体の学はなかなか成立しがたい」として、「直観の問題が介入しなければならぬ余地」の存在を指摘する⁽⁴⁰⁾。このように風巻は、実証主義的国文学に対して自身がこれまでおこなってきた批判に接続するかたちで、「歴史社会学派」に対しても「客観主義」というカテゴリーのなかに位置づけることによって批判を加えているのである。

このように「客観主義」が批判的タームとして風巻のなかに定着しているという事実は、彼が三〇年代前半の段階において否定していた「主観的」「直観的」なものへと立ち返ろうとしていることを示している。たしかにこの段階では、小論の冒頭で示した『文学の発生』以後のように「主体的」ないし「主体性」という表現に向けて議論が集約されるかたちにはなっていない。だが三七年の段階でも、前掲の「学界進化の第二次徴候」(『文学』三七年七月号)での、従来の古典評価が一掃された暁に可能となる「真に主体的な評価」という表現に見るような、「主体的」という修飾語の肯定的な文脈ないし意味のなかでの使用が見受けられることをあらためて確認しておきたい⁽⁴¹⁾。

五 「論争」の終わり

一九三七年末から三八年にかけて、風巻個人における歴史社会学派との離反という事件と並行して、国文学界には大きな状況の変化が起きていた。それは、「歴史社会学派」をマルクス主義者と名指ししての批判がなされたことと、それに続いての、論争の季節の終焉である。

三七年九月に公刊された「古典及び古典教育について」⁽⁴²⁾という論文で岡崎義恵は、「文芸学論争」における論敵であった石山徹郎および熊谷孝の古典評価についての発言を取り上げて、彼らの「歴史的・社会的立場」が「マルクス主義の亜流」であると断じ、「此派を行く所まで行かせると、当然赤化行動に迄進むに相違ない」と述べた。⁽⁴³⁾

この岡崎の発言をスキャンダラスに増幅させたのが、すでにその名を引いた藤田徳太郎である。藤田は三七年十二月の『作品』誌上の「野合」と題する文章で岡崎の発言を引いて、歴史社会学派の国文学者（より端的には近藤忠義）⁽⁴⁴⁾がその政治的立場を表面に立てず、あるいは偽ってアカデミアの国文学と結託していることを揶揄する一方、翌三八年一月の『国文学 解釈と鑑賞』『国文学時評』では石山徹郎を相手に、唯物論者が「既に学術ではなくて、行動の部類に入つてゐる」国語教育に従事していることに非を鳴らしているのである。⁽⁴⁵⁾

この藤田による左派国文学者批判が、自由な言論に対する抑圧としてどれほどの力を発揮したのかは、にわかには断じがたいが、「マルクス主義」というレッテルが公然と貼られたことが引き起こしたショックの大きさは想像に難くない。三八年に入ると国文学雑誌の論争を前提にした誌面構成は少なくなり、三七年において学界の話題の中心だった文芸学論争も三八年九月の『理想』『日本文芸学』主題号を最後に終了する。相手に対する批判をつうじて自らの立場を主張・形成するスタイルをとってきた歴史社会学派は、論争の場が失われるとともに、「学派」としての逼塞をやむなくされたのである。⁽⁴⁶⁾

この藤田による批判は、風巻にも向けられていた。藤田は前掲『国文学 解釈と鑑賞』三八年一月の「国文学時評」で、前掲の風巻「昭和十二年度国文学界概評」(『文学』一九三七年十二月号)を名指しせずに取り上げ、あえて回りくどい言い方をする「生活派」と呼んで罵倒している。これは風巻が「今年度は政治上社会生活上異常に緊迫した情勢を体験したが、それにつれて国文学者中に、明らかに強権を暗に意識しつつ恐喝的言辞をなす人が発生した」と述べたことに反応したものであるらしく、藤田は「強権がどうかのこのと泣言を言つては、男の前に出た小娘のやうには羞づかしがつたりするものがある」、だから国文学者が他分野から馬鹿にされるのだと言ひ捨てている。このやり取りから察すれば、風巻もまた恫喝の対象としての自らの立場を意識させられたらうと考えられる。

六 ロマン派的なもの

一九三八年において風巻は、七月の東京音楽学校教授就任という生活面での転機を迎える一方、⁽⁴⁷⁾ 研究の面でも、『日本文学研究』『文学』に三回に分けて掲載された「桜桃」という語をめぐる論考や、近藤忠義編集の『日本古典読本』（日本評論社）の第八巻として刊行された『謡曲』のような、『新古今時代』刊行以後やや遠ざかっていた、いわば実証的な考証や註釈・解説の仕事に立ち戻るといふ変化を見せている。

ただここで指摘しておきたいのは、歴史社会学派の活動の沈静化の後、国文学界で注目を集めることになった『文芸文化』のグループと風巻のかかわりである。雑誌『文芸文化』は、国文学者・斎藤清衛の広島高等師範学校における教員であった清水文雄、栗山理一、蓮田善明、池田勉らの若手国文学者のグループ「日本文学の会」によって一九三八年七月に創刊されている。のちに三島由紀夫の作家としてのデビューの場となるこの雑誌の創刊号には、巻頭から二番目、グループの精神的指導者である斎藤清衛の文章に次ぐ場所に、同じポイント・一段組で風景次郎のエッセイ「神話にことよせて」⁽⁴⁹⁾が置かれている。このことから『文芸文化』の同人たちが風巻に寄せていた、尊敬あるいは親近感の大きさが感じ取れる。

三七年における『文芸復興』の創刊と休刊、三八年における『文芸文化』の登場という出来事は、むしろ国文学界における左派の退勢とロマン派的勢力の伸長という事態を映したものであるが、一方で『文芸文化』の登場は、三〇年代前半から文芸学論争の時期まで新しい国文学研究をめざす立場の研究者に曲がりなりにも共有されてきた「文学自体を対象とする」という問題意識が乗り越えられつつあることを示すものでもあった。『文芸文化』第二号（一九三八年八月）の巻頭論文「文芸精神——文芸学の対象としての——」で、この雑誌の「発刊の辞」の筆者でもあった池田勉は「文芸を文化として考察すること」の必要性を説き、作品と同時に「創造する働きや力を知る」とが文化究明の基本的問題⁽⁵⁰⁾だとするのである。この文学自体から「創造する働きや力」、換言すれば創作主体へ

という重心の移動は、風巻における主体的なものへの回帰と並行したものと見ることが出来る。『文芸文化』の同人たちの風巻への親近感、そうした共通点の認識に立ったものだと考えられるのではないだろうか。

この『文芸文化』との親近性を指摘されてきたのが『日本浪漫派』とそのグループであるが、その中心的存在であった保田与重郎は、のちに『後鳥羽院』（思潮社、一九三九年十月刊）に収められる「日本文芸の伝統を愛しむ」〔短歌研究、一九三七年二月号〕や「芭蕉の新たな生命」〔俳句研究、一九三七年四月号〕、さらに『戴冠詩人の御一人者』（東京堂、一九三八年九月刊）の「緒言」などにおいて、既成の国文学研究を批判しつつ、精神の系譜ないし「血統」としての新たな日本文学史の伝統を自らが提示し得ていると主張していた。この保田による文学史の試みについて風巻は、三八年末の時評で、「文学そのものの歴史について、学会の業績が未開拓のままに残されて」いたからこそ登場できた存在として、きわめて冷淡に扱っている。⁽⁵¹⁾

しかしその冷淡さは、風巻自身が三〇年代の早い時期に文学史書き換えの必要性を主張しながら、いまだに自らの文学史観を確立できておらず、具体的な文学史記述も発表できていないなかで、風巻同様に折口信夫の強い影響を自認する保田が、新古今時代の後鳥羽上皇を中軸に、ヤマトタケルノミコト、大津皇子から芭蕉へといたる系譜を提示したことへの、焦りの気持ちの裏返しであったとも見ることが出来る。

風巻にとって一九三〇年代最後の大きな仕事といえる『中世の文学伝統』（日本放送出版協会、一九四〇年二月刊）は、その意味で風巻なりの系譜の提示の試みであったと考えられる。この著作の記述の対象は、『千載集』から三条西実隆の死去にいたるまでの中世和歌史であり、すでに引いた論文「新古今集について」〔『文芸復興』一九三七年十・十一月合併号〕をほぼそのまま織り込みつつ、藤原俊成における「自覚的な伝統の樹立」、西行における「現実を精神に隷属させる豪奢な放蕩」⁽⁵⁴⁾をあわせて論じていることから理解されるように、三七年の段階で風巻が到達していた、現代的な意義をもつ古典としての『新古今集』に特権的な価値を認める立場が前提となっていることは確かである。

しかし一方で風巻は、自らの問題意識が「日本の文化の歴史をはつきりと知ることの欲求」⁽⁵⁵⁾にあると明言してい

る。風巻によれば平安期から中世にわたっての和歌は、「個人の心情を通した抒情」をその本質とする今日的な意味での「文学」たりえていた。したがって中世和歌の解析は、そのまま日本文学史全体につながる問題の考察につながるものであり、それによって風巻は保田与重郎による人物的系譜ないし「血統」に、文学自体の感性の連続性を対置したのだと言えるのではないか。そしてそれはまた、風巻にとっての次の仕事である『文学の発生』における、主体的経験としてのみ可能な「文学」という、文学史の前提の設定作業へと接続するものであった。

おわりに

風巻景次郎については従来、歴史社会学派の中心的メンバーとする見方、あるいはそれを前提として、戦中期の風巻の「転向」ないし「転回」を指摘する見方がなされてきた。⁽⁵⁶⁾しかし本稿で一九三〇年代後半の風巻景次郎の発言と仕事を時系列に沿って検討するなかで、国文学界の動向に敏感に反応しながらも、独自の方向性を模索していた風巻の姿が明らかになった。文芸学論争の時期において風巻がたどった思考の軌跡は、たんに風巻と歴史社会学派との関係という問題にとどまらず、戦後の国文学研究のあり方からレトロスペクティブに構築されてきた「国文学の戦前・戦中」についての、より慎重な検討作業の必要性を示唆するものであると思われる。

本稿では一九三〇年代という時代的な枠のなかで、「主体性」が風巻にとっての鍵概念として最終的に定着するのを見届けることはできなかったが、機会を改めて、そのプロセスにおいて触媒の役割を果たしたと考えられる隣接領域の業績——たとえば時枝誠記の国語学における「主体的立場」と「観察者の立場」の議論⁽⁵⁷⁾——等を視野におさめつつ、風巻をはじめとする一九四〇年代における文学・文学史をめぐる問題を論じたいと思う。

※本文・注ともに、引用文における仮名遣いは原文のまま、漢字については新字体に改めた。

※出典のうち『全集』とあるのは、『風巻景次郎全集』(全一〇巻)(桜楓社、一九六九・七一年)の略である。

《注》

- (1) 西郷信綱「文学史の非完結性」『古典の影——学問の危機について』(平凡社、一九九五年)を参照。
- (2) 風巻景次郎「文学の発生」『文学の発生』(子文書房、一九四〇年)、三二頁。
- (3) 風巻景次郎「文学の発生」『文学の発生』七頁。
- (4) 風巻景次郎「文学の発生」『文学の発生』一四頁。
- (5) 初出時の題名は「新興国文学の再建」、『文学の発生』収録時に改題された。
- (6) 風巻景次郎「新興国文学」『文学の発生』二六一—二頁。
- (7) 初出時の題名は「定家伝より見たる一つの問題」。
- (8) 風巻景次郎「新古今時代」(人文書院、一九三六年)、四二—頁。
- (9) 風巻景次郎「新古今時代」一九八頁。
- (10) 西下経一(書評) 風巻景次郎氏著「新古今時代」『国語と国文学』一九三六年九月号、九二—四頁。
- (11) 風巻景次郎は東大卒業の翌年一九二七年春から三二年夏まで、大阪府女子専門学校に勤務している。
- (12) 石山徹郎(「新刊紹介」)「新古今時代」風巻景次郎氏著「文学」一九三六年十二月号、一三〇—三頁。
- (13) 平林 一「国文学者の抵抗——歴史社会学派——」、同志社大学人文科学研究所編「戦時下抵抗の研究Ⅱ」(みすず書房、一九六九年)、四〇〇頁。
- (14) 石山徹郎「国文学界の諸学派」『日本文芸史論』(伊藤書店、一九四八年)、一八一—二〇六頁。
- (15) 近藤忠義の『日本文学原論』(同文書院刊、ただし名義は岳父の藤村作)が出版されたのは、一九三七年二月のことである。
- (16) 永積安明「風巻さんとの出会い——昭和10年代の一瞬」『風巻景次郎とその周辺』(桜楓社、一九八〇年)、七六—七頁。
- (17) 永積安明「新古今和歌集論稿」『中世文学論』(日本評論社、一九四六年)、六四頁。
- (18) 近藤忠義「和歌史上に於ける貴族——末期荘園貴族と新古今時代の和歌——」『短歌研究』一九三七年一月号、一九九頁。なお同論文は『日本文学原論』に「新古今と和歌美の再構成」と改題して収録されている。なおこの近藤の論理は「能楽論における中世的限界」(『文学』一九三七年二月号)のなかでも繰り返され、中世的な美を「日本的なるもの」の本質と捉えることが断罪されている。
- (19) この当時「国語と国文学」「文学」のような国文学専門誌のみならず、改造社発行の『短歌研究』『俳句研究』のような一般読者を対象とした雑誌にまで国文学界について時評が登場している。しかし毎号連載という点でも「国文学 解釈と鑑賞」の「国文学時評」は目立った存在であった。
- (20) 塩田良平「国文学時評」『国文学 解釈と鑑賞』一九三七年十二月号、三八頁。

- (21) 風巻景次郎「今年度国文学界の展望」『短歌研究』一九三六年十二月号、二〇九—一五頁。
- (22) 藤田徳太郎「国文学時評——実証主義研究論者の言——」『国文学 解釈と鑑賞』一九三七年一月号、四六—五四頁。
- (23) 風巻景次郎「国文学時評——実証主義に触れて——」『国文学 解釈と鑑賞』一九三七年二月号、三六—四一頁。
- (24) 藤田徳太郎「国文学時評」『国文学 解釈と鑑賞』一九三七年七月号、六八—七二頁。
- (25) 風巻景次郎「実証主義と実証精神」『国語と国文学』一九三七年七月号、八三—八六頁。
- (26) 風巻景次郎「学界進化の第二次徴候」『文学』一九三七年七月号、九四—八頁。
- (27) 風巻景次郎「日本のといふこと」『文学の発生』四六頁。
- (28) 風巻景次郎「研究の対象としふての古典」『文学の発生』三〇九—三三頁。
- (29) 風巻景次郎「短歌史は何処へ(一)」『水滸』一九三七年五月号、二七および二九頁。
- (30) 柴生田稔「古典文学」『国文学 解釈と鑑賞』一九三七年八月号、六九頁。
- (31) 風巻景次郎「もののおはれ論」の史的限界」『文芸復興』一九三七年七月号、二四—三八頁。
- (32) 近藤忠義「ジイド氾濫」『日本文学の進路』(伊藤書店、一九四八年)九四—一〇〇頁。なお三七年一月の『中央公論』誌上には、アンドレ・ジイド(小松清訳)『ソヴェト旅行記』(Rejours de U.R.S.S.の抜粋)が掲載され、同年三月には第一書房から単行本が刊行されている。また近藤は『国文学 解釈と鑑賞』五月号に「文芸批評におけるジイド的なるもの」と題する文芸批評を書いており、そのなかで同旅行記に批判的に触れている。
- (33) 風巻景次郎「芭蕉に於ける人間構造」『俳句研究』一九三七年七月号、六三—四頁。
- (34) 永積安明「文芸学の建設(国文学時評)——石山徹郎氏の近業を中心に——」『国文学 解釈と鑑賞』一九三七年八月号、四九—五三頁。
- (35) 永積安明「国文学時評——公平にでなく公正に——」『国文学 解釈と鑑賞』一九三六年十一月号、四五—五一頁。
- (36) 風巻景次郎「古典研究の歴史」『全集』第一巻、五九七頁。
- (37) 風巻景次郎「新古今集なるもの意義」『短歌研究』一九三七年八月号、二四—五頁。
- (38) 風巻景次郎「新古今集なるもの意義」『短歌研究』一九三七年八月号、二七頁。
- (39) 風巻景次郎「新古今集について」『文芸復興』一九三七年十月、十一月合併号、五〇—六四頁。同論文はのち「新古今集の叙景と抒情」と改題して『文学の発生』に収められている。
- (40) 風巻景次郎「(回顧と展望) 昭和十二年度国文学界概評」『文学』一九三七年十二月号、一〇三—一六頁。
- (41) 他の前掲論文の例を引くと、「もののおはれ」論の史的限界」(『文芸復興』三七年七月号)においても本居宣長を「主体的な理想家」と呼ぶとともに、「傍観者的考証学者」(ここには実証主義的国文学者が二重写しにされている)と対比し

- て「官長のものあはれの取り上げ方は極めて主体的である」ことがホジティヴに評価されている。また「新古今集について」(『文芸復興』一九三七年十一月合併号)のなかでは藤原定家について「彼の主体的欲求」という表現が見られる。
- (42) 岡崎義恵「古典及び古典教育について」『岩波講座 国語教育』(第十二回配本、第五分冊、第五分冊)。(岩波書店、一九三七年)。
- (43) この論文で岡崎が自分が賛同できる説として取り上げているのが、風巻の前掲論文「研究の対象としての古典」である。
- (44) 藤田徳太郎「野合」『作品』一九三七年十二月号、四一―六頁。なおこの号は「国語・国文学の諸問題」小特集であり、藤田の他、石井庄司、福田清人、志田延義、風巻、石山徹郎が寄稿している。なお風巻の文章「今年度国文学界の回顧」は「全集」未収録であり「論文・著作目録」にも記載されていない。
- (45) 藤田徳太郎「国文学時評」『国文学 解釈と鑑賞』一九三八年一月号、六三―七頁。藤田の近藤らに対する批判と、戦後におけるその伝説化については、村井紀「国文学者の十五年戦争(一)」「批評空間」II―一六、一九九八年一月、および同「国文学者の十五年戦争(二)」「批評空間」II―一八、一九九八年七月、を参照。ただここでは藤田が「国語教育」という点から左翼批判をおこなっていることに注意しておきたい。
- (46) 『国文学 解釈と鑑賞』の「国文学時評」欄も、一九三八年末に斎藤清衛と風巻景次郎による学界・文壇回顧を最後に終了している。
- (47) 「年譜」(『全集』第十卷)によれば、風巻は三五年春に長野県女子専門学校教授を病氣退職し上京して以後、私立専門学校の講師を兼職する「浪人生活」を送っていた。
- なお東京音楽学校教授の職務として風巻は、多くの歌曲や式典曲の作詞を担当しており、上記「年譜」によればその一つに紀元二六〇〇年の「祝典歌」がある。この「祝典歌」については「金鶏輝く日本の」という有名なフレーズで始まる「国民奉祝歌」とする見方があるが(塚本康彦「折口・保田・堀・風巻 国文学 その内部外界六―」『伝統と近代』一九六八年十二月号)、これは一般公募によるものであり(増田好生作詞、現在「東京音楽学校作詞・作曲」として残る「紀元二千六百年頌歌」が風巻の作詞した「祝典歌」であると思われる。(なお戦後の新憲法発布記念式典にあたって風巻は、東京音楽学校講師としてカンタータ「偉いなる朝」を作詞している。)
- (48) 「桜桃歌——ははか・かには・かには桜・かば桜・白権・ゆすらうめ——」『日本文学研究』第二輯(白帝社、一九三八年七月)、「続桜桃歌(一)——カニハサクラ・カハサクラ・カニハ・カハ考——」『文学』一九三八年七月号、「続桜桃歌(二)——カニハサクラ・カハサクラ・カニハ・カハ考——」『文学』一九三八年九月号。
- (49) 雑誌創刊前にさかのぼると、同人の一人蓮田善明は、「古典と「今日」(『文学』三七年十一月号)で、風巻の論文「研究の対象としての古典」における現代的意義を古典に見出そうとする態度を前提として、さらに神話の時代として現代を捉える見方を提示していた。

- (50) 作品よりむしろ創作主体のあり方に関心を持つという点では、斎藤清衛の影響が感じられる。斎藤は「中世文学の史的定位——庶民的精神の隆起と新知識層の文学——」(『国語と国文学』一九三一年十月号)で、ドイツ人旅行家カイザリントク「日本人は疑もなく非実質的である。態度が総てである場合に、内容の欠けてをるのは当然のことである」という言葉に従い、中世日本の芸術的特質を「態度の芸術」と呼んでいたが、『短歌研究』一九三八年八月号では、「態度の芸術」という小文を発表し、「態度」を日本文学・芸術全体のキーワードにしている(両方の文章とも斎藤「精神美としての日本文学」、人文書院、一九三八年十月刊、に収録)。カイザリントクの言葉については下山鎌吉・江川和彦共訳「カイザリントクの日本観」(文明協会、一九二六年)、一一〇頁を参照。
- (51) 風巻景次郎「文学界のことども」『国文学 解釈と鑑賞』一九三八年十二月、五七―六三頁。ところが晩年(一九五九年)の風巻は保田について、「その生活と文学と思想との美学の根本は、ずばぬけて真実である」とし、「幕府の軍部」による圧制のなかで平安朝文学を「真に文学として主体的に把握し、日本古典の美として再発見し、体験し」「抒情詩としての和歌の線で、日本の古典の世界を、近代人としてはじめて文学として捕え得ている」として、手放して絶賛している。『古典研究の歴史』『全集』第一巻、五九四―六頁。
- (52) 「改版の序」には、「昭和十四年の年末に原稿を書きあげて、翌年一月二十日づけの序をしたためた」とある(『全集』第五巻、三〇五頁)。
- (53) 風巻景次郎「中世の文学伝統——和歌文学論——」(ラチオ新書九)(日本放送出版協会、一九四〇年)、六五頁。
- (54) 風巻景次郎「中世の文学伝統」七二頁。
- (55) 風巻景次郎「中世の文学伝統」二二頁。
- (56) 「少なくともかつての歴史社会学派の盟友としての近藤忠義さんの側から言うと、俱に天は戴きたくないような風巻的転向があったんだと思うんですよ」(座談会)『文学研究における戦後の出発』における益田勝実の発言)『日本文学』一九七八年十月号、一六頁。
- (57) 時枝誠記「言語に対する二の立場——主体的立場と観察者の立場——」『言語本質論』(岩波書店、一九七三年)を参照(初出は『コトバ』二ノ七、一九四〇年二月)。この論文では研究者としての立場である「観察者の立場」と、言語行為の実践者としての「主体的立場」を区別するとともに、後者が前者の前提であること、「主体的」「客観的」両方の立場を関連づけ、また言語の実践と研究を接続しようとする。なおこの論文の発表時期は風巻の『文学の発生』の刊行(四〇年十月)に先立っている。

付記 本論文は二〇〇四年度法政大学特別研究助成金の研究成果の一部である。

(比較文学・法学部教授)